

楽曲構造の理解にせまる鑑賞授業の取り組み

一附属小学校との協働による検証授業を通して一

An Approach to Music Appreciation Classes Focusing on Understanding of Musical Structure:
Using a verification class with cooperation by an attached elementary school

伊 藤 誠*
Makoto ITO

川 上 拓 治**
Takuji KAWAKAMI

橋 本 慎 也**
Shinya HASHIMOTO

1. はじめに

筆者が毎年度、専修別に組分けされた複数の音楽科指導法を担当しているが、そのなかで音楽鑑賞の意義や鑑賞指導のポイントについての講義と合わせて、実りのある鑑賞学習をめざした模擬授業を、履修者全員に課している。模擬授業をするうえで注意する点として「楽曲の何を聴くのか、その目的をはっきり伝えてから音楽をながす」「特に部分視聴を有効に使って、くりかえし聴かせる」「音楽の時間的経緯をわかりやすく図式化して板書する」「視聴覚ソフトを有効に活用する」などをあげるのだが、やはり具体的な指導実践例がないと本当の意味で彼らに理解を求めることがむずかしいようである。そこで、一つの例としてここ数年取り上げているのが、小学校中学年（あるいは高学年）を対象にした《ホルン協奏曲第1番第1楽章》（モーツァルト作曲）¹を教材にした授業である。独奏楽器であるホルンの音色を味わわせること、「主なふし」²（ソナタ形式の第1主題）だけを認識させること（回数をかぞえられること）、協奏曲という様式を理解させることなどをねらいとした授業の提案である。

そこでこの授業の意義を検証するために、教育学部附属小学校および音楽科教諭2名の協力のもとで、4年生と5年生のそれぞれ1クラスの児童を対象に授業を実施することにした。本稿では、当日の授業進行、学習プリントの分析結果などを中心に述べていく。

2. 授業進行の手順

3回にわたる入念な打合せを行った結果、以下のような授業進行のプラン（全部で11の指導場面からなる）ができあがった。ただし4年生と5年生で担当教諭が異なることから、全体構成の重要な部分だけは固めておいて、発問の仕方や状況に応じた指示・説明などは、担当教諭の裁量に任せることにした。なお当日の授業風景として

6枚（両日の授業3枚ずつ）の写真に掲載した。写真にはチャプターを付けたが、「授業の流れ」の対応する指導場面の箇所に写真番号を挿入した。

「授業の流れ」

<1>

最初に聞こえてくる、ある楽器の音に注意して聴いて下さい。どんな楽器が鳴っているかな。この楽器の名前や、音を出すときの構え方を知っている人が、このクラスのなかにもいるかもしれません。

鑑 W.Kohl作曲：ホルン四重奏曲op.3-3

楽器の名前は「ホルン」といいます。あとで演奏しているところの映像が見られますので楽しみにして下さい。

<2>

きょう鑑賞する曲は、実はこの音楽ではありません。「モーツァルトのホルン協奏曲」という曲を取り上げます。これからしっかり聴くことにしましょう。＜曲名を板書したあとで＞（1）さて「協奏曲」って何だろうね。（2）この曲にもホルンが使われています。曲名が「ホルン協奏曲」だから当然ですね。では、曲の途中でホルンの音色が聞こえたら、そこで手をあげて下さい。（写真4）

鑑 1回目：モーツァルトを聴く（映像なし）途中まで。この曲をどこかで聞いたことがある人は、プリント（1）の質問の“はい”に○、聞いたことがない人は“いいえ”に○を付けて下さい。☞ Print（1）

<3>

ホルンの音、みんな聴き取れましたか（写真1）。ホルンの音の聴き取りができた人は“はい”に○を、聴き取れなかった人は“いいえ”に○を付けて下さい。☞ Print（2）

* 埼玉大学教育学部

** 埼玉大学教育学部附属小学校

次はこの曲の「主なふし」を覚えてもらいますよ。＜教師、Pianoで伴奏を付けてラララで4小節分を歌う（へ長調で）＞。みんなも一緒に歌ってみよう。曲のなかにこの「主なふし」が何回出てくるか、心のなかで数えてみましょう。

＜もう一度Pianoで伴奏を付けて、教師と児童がともに歌う。＞ここで音楽を流しますが、今度も途中まで聴きます。

鑑 2回目：モーツァルトを聴く（映像なし）途中まで。友だちと相談せずに、聴き取った回数をプリントに書き入れましょう。☞ Print（3）①

正解は2回でしたので、その下の括弧のなかに「2」と書いて下さい。☞ Print（3）②

<4>

2回聴こえたけれど、ホルンがこの「主なふし」を演奏していたのは何回目のときだったかな。覚えていますか。もう一度聴きましょう。聴き終わったら、相談をしないで何回目かをプリントに書いて下さい。☞ Print（4）

鑑 3回目：モーツァルトを聴く（映像なし）途中まで。そう、答えは「2回目」でした。

<5>

1回目に「主なふし」を演奏していた楽器は何だったかな。今度は映像付きでもう一度聴いてみよう（写真2）。

鑑 4回目：モーツァルトを聴く（映像あり）途中まで。そう、ヴァイオリンですね（現物を見せる）。ホルンやヴァイオリンの他にも、いろいろな楽器を演奏している人がいました。でも今日は、特にホルンとヴァイオリンという2つの楽器だけに注目しましょう。

<6>

先ほども歌ったけれど、もう一度「主なふし」をラララで歌ってみましょう。＜教師、Pianoで伴奏を付ける（ただし、ここでも4小節のみ）＞。いよいよ、この曲を最初から最後まで聴いてみましょう。聴き取ってもらうことは先ほどと同じで「主なふし」が何回出てくるか、心のなかで数えて下さい。聴き終わったら、プリントに回数を書いて下さい（写真5）。

鑑 5回目：モーツァルトを聴く（映像なし）全曲。答え合わせをする。＜正解は5回ないし6回であるが、おそらく意見は分かれるだろう。＞☞ Print（5）①

<7>

答えが合わなかった人のために、先生もみんなと一緒に数えたいと思います。ホルンとヴァイオリンの絵を用意したので、「主なふし」がでてくるたびに、順番に貼付けていきます。今度は演奏風景も見ながら、注意して聴いて下さい。

鑑 6回目：モーツァルトを聴く（映像あり）全曲。曲の進行とともに、6枚の絵を貼付けていく（写真6）。

<8>

ところで、先ほど正解を5回または6回と言いました。この5回目のホルンが演奏したとき、そのメロディは「主なふし」と似ているのだけれど、でも少し違って聴こえたぞ、と思った人はいませんか。きっとこの違いに気付いていた人がいたかもしれません。実はこのような違いがありました。＜教師、Pianoで長調と短調を使い分けて、聴き比べをさせる。＞

どうですか。この違いに気付いたかな。違いを感じた人は、ひょっとするとこの「1回」を数のなかに入れなかったと思います。そういう理由から「主なふし」の回数の正解を5回または6回と言ったわけですね。でも「主なふし」に似ていることから、正解は6回にしましょう。＜ここで正解をはっきり「6回」と宣言する。＞☞ Print（5）②

<9>

貼付けた6枚の楽器の絵を見て下さい。この曲の場合、「主なふし」を時にはホルンが演奏したり、時にはヴァイオリンが演奏したりして曲ができていくことがわかりますね。授業の最初に「協奏曲って何だろう」と質問しました。「協奏曲」という漢字に注目してみましょう。「協力」しながら「演奏」する「曲」と書いてありますよ。もうわかると思いますが、この曲の場合、協力し合って演奏する楽器とは何と何でしょうか。プリントに書き入れましょう。☞ Print（6）

その通り。ステージの中央で起立して男の人が演奏しているホルンと、オーケストラのなかのヴァイオリンとが「主なふし」を、ちょうど仲よく3回ずつ、時間をおいて代わる代わる演奏することでこの曲はできている、ということがわかりますね。これが今日の曲（モーツァルトが作曲したホルン協奏曲）の特徴なのですね。

<10>

ここで面白いことをやってみよう。「主なふし」を演奏しているところだけをつないで聴いてみましょう。

鑑 7回目：モーツァルトを聴く（映像あり）メドレー版。

どうでしたか。このように大切な部分をつなぎ合わせて聴いてみると、「主なふし」にまた別の雰囲気の違いが感じられたと思いますが……。気付いた人はいるかな。もしその違いを説明できる人は、プリントの四角のなかに自分の意見を書いて下さい。☞ Print（7）

<11>

最後に、もう一度全体を通して聴きましょう。

⑧ 8回目：モーツァルトを聴く（映像あり）全曲。

授業のまとめをしましょう。今日はモーツァルトが作曲した「ホルン協奏曲第1番第1楽章」を鑑賞しました。「主なふし」を覚えることで、曲のなかにこのメロディがいくつ隠れているかを聴き取りましたね。答えは6回でしたが、調べてみると、ホルンとヴァイオリンがそれぞれ3回ずつ演奏していることがわかりました。このように「主なふし」（つまり大切なメロディ）を覚えてこの曲を聴いてみると、はじめはむずかしそうな曲だなと思った人も、この曲が少しずつ頭に入ってきて曲が好きになってきたのではないかなと思います（写真3）。学習プリント（8）の質問に答えて下さい。4つのなかから、一つだけ選んで○を付けて下さい。☞ Print（8）最後の質問（9）ですが、半年以上習っている楽器がある人だけ、四角のなかにその楽器名を書いて下さい。ではプリントを集めます。名前の書き忘れがないかを確認して下さい。☞ Print（9）

3. 学習プリントから見えてきたもの

授業終了後に回収した学習プリント（6/16は39枚、6/21は40枚）から、いろいろなことが浮かび上がった。以下3つの項目に分けて考察したい。

4-1 「主なふし」聴き取りの結果について

＜表1＞

質問番号とその質問内容等	4年2組 (39名)	5年3組 (40名)
(1) どこかで聞いて知っていたか……「はい」	3 2	3 5
(2) ホルンの音色を聴き取れたか……「はい」	3 5	4 0
(3) 途中まで聴いて、回数が数えられた	1 5	4 0
(4) ホルンが2回目に鳴ったことを理解した	2 8	4 0
(5) 第1楽章を聴いて、回数を数えられた	3 6	4 0
楽器経験者の有無（半年以上習っている楽器）	2 0	2 4

質問内容の詳細は、巻末に掲載した「学習プリント」を参照されたい。表1のように（3）と（4）の質問において、両学年で大きな差があらわれた。（3）は、主なふしが2回演奏されたところまでを聴いて自分の意見として聴き取った回数を書く質問であったが、5年生が全員正解しているのに対して、4年生では正解者がわずか15名しかいない。間違った回答の内訳は3回と4回がともに10名ずつ、5回・6回・7回・9回が1名ずつで、「2回」という正解の数から、かなりかけ離れた回答をしている児童がいた。当然のことながら（4）の質問においても、4年生の方だけに不正解者が11名おり、そのうちの5名は回答をしていないことがわかった。ところが（2）の質問でホルンの音色を聴き取れなかったと答

えた児童は（5名のなかで）1名しかいない。やや理解に苦しむ結果と言わざるを得ない。

第1楽章全体を鑑賞する前に、教師が再度主なふしをピアノ伴奏で歌わせているが、このことが（指導計画どおりだったとはいえ）結果的によい効果をもたらした。回答にばらつきが目立った4年生も、今度は（3名を除いて）聴き取っていた。聴き取れなかったこの3名の回答は、3回・4回・7回であった。この3名が（3）の質問でどう解答していたかをみてみたが、やはり途中までの聴き取りも正解していないことがわかった。

4-2 本授業の「自己評価」の結果—2学年間の違い—

＜表2＞

「ホルン協奏曲の特ちょうを説明できますか」	4年2組 (39名)	5年3組 (40名)
できる	1 5	1 0
だいたいできる	1 5	2 1
あまりできない	7	9
できない	2	0

学習プリントの最後に「ホルン協奏曲第1番の特ちょうを説明できますか」という質問を設けた。ここでは、むしろ5年生の方に予想外の結果があらわれた。表1に示したように、5年生は（2）から（5）の質問に対して全員が正解していたにもかかわらず、表2のように（8）の質問で9名の児童が「あまりできない」を選択している。さらに「できる」が10名だったのに対して、「だいたいできる」が21名もいたことである。これはどう解釈すればよいのだろうか。

楽曲構造を理解する糸口として、授業では「主なふし」の回数を正確に数えることや、入れ替わりながら主なふしを演奏した2つの楽器について答えを求めたわけだが、これらを聴き取ることなど5年生にとっては、いとも簡単な課題だったのではないだろうか。それよりも、授業後半に触れられた次の2つの点が気になってしまったのではないかと考える。それは、5回目だけが短調で演奏されていることや、ヴァイオリンが演奏する主なふしに3種類の調が使われていること（すなわち6回にわたる主なふしの演奏のなかにあらわれた、音楽を構成する要素の微妙な違いの聴き取り）である。前者については、教師が主なふしを長調と短調で弾き分けながら若干の説明をしたが、後者については「もし雰囲気の違いがわかれば、下の四角のなかに自由に書いてください。」と指示しただけで、その答え合わせは特にしていない³。

彼らは、質問（7）に対してさまざまな意見を書いていた⁴。無回答だった児童は1名しかいない。ところで、先に触れた「あまりできない」を選択した9名の児童の意見に対する評価は、1名を除いて「C」であった。この事実から、彼らの心境をわずかながら推測することが

できる。くり返しになるが、(2) から (5) の質問に答えられれば、この曲の特徴を理解したことになると筆者はとらえていた。つまり、それができたのならば (8) では、ほとんどの児童が「説明できる」を選ぶであろうと思っていた。この予想外の結果は、5年生の学習への意欲や関心が旺盛だったことを示している。4年生も、全体の聴き取りでは期待どおりの結果を出してくれたが、5年生の自己評価（自己診断）のきびしさを、より強く感じ取る結果となった。

4-3 楽器経験の有無と理解度の関係性

＜表 3＞

今までに半年以上習っている楽器		4年2組 (39名)	5年3組 (40名)
楽器経験 あり	ピアノ	19	18
	ヴァイオリン	1	3
	電子オルガン	1	1
	オルガン		2
	ホルン		1
	サクソ		1
	フルート		1
	篠 笛	1	
	計	22	27
楽器経験 なし	計	19	16

表 3 のように、4年生も5年生も楽器経験者の数が未経験者の数を上回っている。しかも2つの楽器を同時に勉強している児童が4年生で2名、5年生では3名含まれている。この集計は、あくまで彼らの回答をそのまま転記したものだが、「オルガン」という回答はおそらく「電子オルガン」のことではないか、と思われる。

＜表 4＞

質問 (7) に対する3段階評価	楽器経験	
	あり	なし
A (12)	8	4
B (10)	8	2
C (18)	8	10
計	24	16

表 4 は質問 (7) の回答に対して3段階評価を行ったうえで、さらにそれを楽器経験の有無別で表した5年生の内訳である。この結果から、必ずしも楽器を経験している児童が、構成要素の変化を敏感に感じ取っていたとはいえないことがわかる。なぜなら楽器経験者24名の評価が、AからCに8名ずつ分散しているからである。しかしAとBの評価の合計数に限定してみると、楽器経験の方が24名中16名（約67%）であるのに対して、未経験の方が16名中6名（約38%）であることから、楽

器経験者の方に多少の優位性が認められるという解釈もできる。

4. 先行研究の検討

本研究をすすめるにあたり、鑑賞授業の方法改善に関する最近の研究動向のなかから山崎 (2010) の論文に注目してみたい⁵。小学校との協同による検証授業がもとなった研究だが、4年生対象の授業でモーツァルト作曲「歌劇『魔笛』」から「夜の女王のアリア」と「パ・パ・パ」を教材に、この2曲から感じた各自のイメージ（内的世界）を明確な記号として外に出すことによって、知覚・感受を可視化させた成果が述べられている。子ども同士の意見交換の際に齟齬が生じないように、聴かせるポイントは限定されたようだが、個々が音楽から受けたもっとも強い要素を漢字一文字に変換したのち、その選んだ理由について話し合うなかで、自分自身でも漠然としていた「その漢字を選んだ理由」を、質疑応答を通してお互い確認し合うことができたことが報告されている。

鑑賞授業における児童一人ひとりの心の動きを記録に残すむずかしさは、今に始まった問題ではない。高須 (2007) は、鑑賞させる音楽のよさや美しさを感じ取ったり味わったりできる能力をはぐくむためには、その学習過程のなかに2つのイメージをもたせる場面をつくる必要があると指摘する。一つは、その音楽と出会って子どもが心のなかに描く情景や様子などの「具体的なイメージ」で、もう一つは音楽の特徴的なことを感じ取り、それを手がかりとして深めていく「楽曲全体のイメージ（抽象的なイメージ）」である。当然前者の学習があつて後者の学習へと移行していくわけだが、高須は前者のイメージを膨らませるための指導の工夫はみられても、後者の領域を深めようとする指導は充分に行われていないと述べている。具体的なイメージを抽象的なイメージへと発展させるためには、音楽を構造的に聴き取る力が求められるだろう。なぜなら構造化されているしきみを聴き取ってこそ、その音楽のおもしろさや美しさに気付くからである。

山崎の研究は、高須があげた「抽象的なイメージ」を形あるものにする手だてとして、知覚・感受した（その時点では漠然としていた）イメージを漢字一文字で表現させるという明晰な手段をとることによって可視化させていた。さらに他者との交流を通して、その漢字を選んだ意図についての理解を共有する時間も設けられていた。いわば抽象的なイメージの「具象化の試み」といえないもない。教材が歌曲であるならばなおさらのこと、曲のタイトルを告げたり歌詞の内容を説明したりしてしまえば簡単にイメージはつくられてしまう。この研究では、独特な方法を用いてこの2曲の楽曲構造の理解をうながす一方、児童一人ひとりの内的世界を形あるものにして、個々のイメージを形成する過程が慎重に扱われていた。

学習プリントの用途は異なるものの、本研究でも児童一人ひとりが楽曲構造を理解していく過程を把握するために、その活動場面ごとに主なふしの聴き取りの足跡を記録させていった。特別な記号による可視化ではないにしても、聴取する長さを2段階（部分視聴と全体視聴）に分けて、さらにそれぞれ「自分の意見」と「正解」とを連記させながらすすめていった手順と方法は、必ずしも間違っていないかと思われる。くり返しにはなるが、＜表1＞4年生の（3）と（5）の結果を比較すると、その成果のあらわれは明白だからである。

5. むすび

昨年10月19日・20日の両日に、埼玉大学教育学部附属小学校主催による教育研究協議会が開催された。「自己を磨く児童を育てる授業の創造—新教育課程の全面実施に向けて—」がこのときの研究主題であったが、今回の検証授業で4年生を担当した川上教諭は「楽器の音色を感じ取ろう」という題材名で、当日4年生に向けた鑑賞授業を行った。この公開授業のテーマを設定した理由として、川上教諭は「鑑賞の活動を通して児童が音楽を形づくっている要素に気付き、より深く楽曲を味わうための方法を模索していく。そのことが、児童の音楽の聴き方に変化を与え……」と述べている。附属小学校が平成20年度からこの研究主題で研究を継続している時期に、この研究テーマの趣旨に合致した授業を、しかも4年生と5年生の両学年を対象に実施させて頂けたことは、筆者にとって実に有意義な機会となった。

さて、授業中の発言や学習プリントの記述などから、おおよそ学習の実現状況についてまとめることができた。両授業とも題材で扱う指導事項として、〔共通事項〕事項アの（ア）からは「音色と旋律」、（イ）からは「反復と変化」を選択したうえで、それらの諸要素の働きを理解できたかどうかを問う質問を、学習プリントのなかですべて組み込んだ。期待どおりの結果につながったことは、今回の構想がほぼ達成された証しといえるだろう。一つ反省点をあげるならば、教師と児童個々がやりとりをする場面は随所に見られたが、子ども同士で意見を交換し合う場面を設定できなかったことである。「集団学習」という機能をいかした授業形態の有効性も、次回の検証授業のたいせつなキーワードにしたい。

注

- 1 この教材曲の映像資料として、『小学校音楽鑑賞共通教材第4学年』（財団法人・音楽鑑賞教育振興会）ONK-101を使用した。本授業の「題材の目標」や「題材で扱う指導事項」に沿う映像内容を含んでいると判断した。なおジャケットのチャプター索引には「主題」というタイトル表記が6カ所に付けられている。
- 2 テーマ、すなわち主題のことを「主なふし」という言

葉で統一した理由は、教科書の表記に従ったからである。

- 3 4年生の授業では(7)の質問を回答させる時間がなくなってしまったため、4年生のデータを得ることはできなかった。
- 4 筆者が求める内容を含んでいる文章には「A」、語彙は伴わないがポイントはつかんでいると認められる文章には「B」、内容自体が質問の趣旨と食い違いをみせている文章には「C」で、それぞれ評価した。
- 5 山崎は、児島・兼平による研究(2010)が、この研究の基盤になったと述べている。

参考文献

川上拓治 (2010)「思いや意図をもって鑑賞し、音楽的感受性を高める指導の工夫」『第78回小学校教育研究協議会要項』埼玉大学教育学部附属小学校、70-74頁

児島大輔（2011）「きめ細かな見取りから評価していく鑑賞
の授業」『音楽鑑賞教育』vol. 6、6-12頁

小島律子、兼平佳枝（2010）「音楽鑑賞授業における『構成活動』としての『図形楽譜づくり』の教材性」『学校音楽教育研究第14巻』日本学校音楽教育実践学会、227-237頁

高須一（2007）「音楽科教育における鑑賞指導の工夫改善の方途」『初等教育資料』No. 818、60-67頁

山崎浩隆 (2010)「小学校中学年における音楽鑑賞学習に関する一考察—歌劇の鑑賞について—」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第59号、205-210頁

6月16日(木曜日)

学 習 プ リ ント

組 名前

モーツァルト作曲
「ホルン協奏曲(きょうそうきょく)第1番 第1楽章」を聴いて

今日、学習したことをかくにんしましょう。

(1) この曲を、どこかで聴いたことはありますか。 () はい () いいえ

(2) ホルンの音色を聴き取ることはできましたか。 () はい () いいえ

(3) 「主なふし」は、
曲の中で何回演奏されていましたか。 ①自分の意見 () 回
②正解は…… () 回

(4) ホルンが「主なふし」を演奏していたのは
何回目でしたか。 () 回目

(5) この曲を最後まで聴きましたが、この「主なふし」が
曲の中で何回演奏されていましたか。 ①自分の意見 () 回
②正解は…… () 回

(6) 協力しながら演奏していた二種類の楽器とは、何と何でしょうか。
() と ()

(7) 「主なふし」の、雰囲気の違いがわかる人は、その違いについて説明して下さい。

(8) 「ホルン協奏曲第1番」の持ちようを説明できますか。下から一つ選んで下さい。
() できる () だいたいできる
() あまりできない () できない

(9) 今までに、半年以上習ったり勉強したりしている楽器があれば書いて下さい。

6/16 4年生の授業

<写真1>

ホルンはこのように構えて……



<写真2>

目と耳を使って、しっかり鑑賞



<写真3>

まとめの段階（「協奏曲」って何？）



6/21 5年生の授業

<写真4>

ホルンの音色，聴き取れたかな



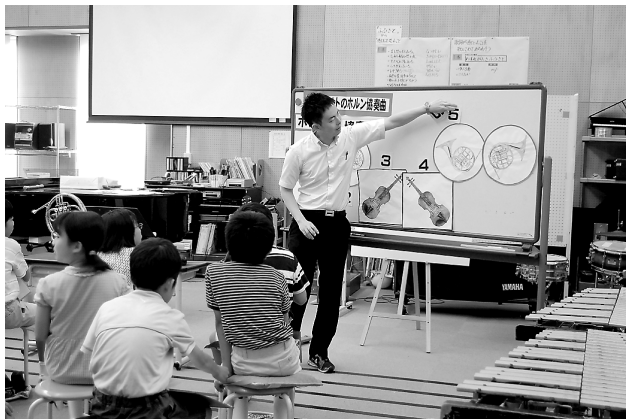
<写真5>

あつ，またあの音楽が聞こえてきたよ



<写真6>

先生もいっしょに答え合わせ



SUMMARY

An Approach to Music Appreciation Classes Focusing on Understanding of Musical Structure: Using a verification class with cooperation by an attached elementary school

Faculty of Education, Saitama University

Makoto ITO

Elementary School, Attached to Saitama University

Takuji KAWAKAMI Shinya HASHIMOTO

On June 16 and June 21, 2011, we carried out a music appreciation verification class using Mozart's *Horn Concerto No. 1, First Movement* with the cooperation of the elementary school attached to Saitama University. The same class content was used on both days (including class flow). Fourth-grade students participated on the 16th and fifth-grade students participated on the 21st.

In adherence to the spirit of the revisions to the Teaching Guidelines, we had students listen for "Musical Structure" (B Appreciation (1) b) and Common Subject Matter A (a) Timbre and Melody and (b) Repetition and Variation, and asked them to discern the "beauty of the work of music" created through the workings of these elements. Then, we set the objective of the material to "Understand the characteristics of *Horn Concerto No. 1, First Movement* by grasping the musical structure while appreciating the mood of the piece."

Considering the effective use of visual materials, we planned and prepared the class while envisioning three stages of listening: (1) Feeling Stage (memory of main melodies); (2) Deepening Listening Stage (grasp of structural elements, hearing the timbres of the horn and violins); and (3) Appreciation Stage (grasp of the piece as a whole). This paper reveals a certain level of progress (learning retention rate) based on the results of learning worksheets collected at the end of the class, mainly regarding whether students were able to listen and pick up the main melodies, and whether they could explain how to listen to the piece of music.

Keywords: Concerto, Appreciation instruction, Common subject matter, Verification class, Learning worksheets